報 文

環境満足度と価値観の関連分析

The Related Analysis on the Degree of Environmental
Satisfactions and One's Sense of Values

坂 部 創 一 *

SUMMARY

The object of this study is to analyze the relation of the degree of satisfactions for the same environments and one's sense of values. As the order of the analysis, first, each one hundred of husbands and wives were made investigation into the above two items. The data, next, were analyzed by a correlation analysis and a factor analysis. As the results of these analyses, it was found that social environments had more much relation than material environments which had few relation to one's sense of values, and which of desires—repression—style had few relation to the various degree of environmental satisfactions, or had more less relation, compared with one's sense of desires—satisfaction—style.

<要 約>

本研究の目的は、同一の環境に対する満足度は、主体の価値観と関連があるかどうかを分析することである。方法は、主人と主婦それぞれ100人を対象に環境満足度と価値観の調査を行ない、そのデータに相関分析、因子分析を用いて分析した。その結果、今回の調査対象の場合、価値観との関連が多くみられたのは社会的環境であり物財的環境とは殆ど関連しないことが分かった。また、欲求抑制型の価値観は欲求充足型の価値観に比較すると、種々の環境満足度との関連が殆どないかあるいは低くなる傾向がみられた。

<はじめに>

我々が日常の生活において、同じ環境条件の中においても、その環境に対する感じ方は人によって異なるということは良く体験することである。しかし、このような事実の要因分析を価値観との関連で計量的に分析している研究はあまりされていない。本研究では、これを、環境満足度と価値観の関連として分析することにした。

1. 分析の方法

本研究における分析の方法は、図-1のフローのとおりである。

2. 調査の方法と集計結果

調査は、昭和60年9月、筑波研究学園都市の並木住宅地区の主婦と主人それぞれ100人を対象に、留置き法（調査票を各対象者の所に届け、後日対象者が記入し

たものを回収する方法）で行なった。回収率は、主婦80%（80人）、主人60%（60人）である。

調査の対象地域は、環境満足度は環境条件によっても左右されることを考えて、住宅や地域の環境条件が同一の筑波研究学園都市住宅地区の一つである並木を選択した。

調査項目は、環境に関する20項目、価値観に関する13項目を設定した。（表1、表2）

アンケートの質問形式は、5段階評定法である。（環境満足度は、かなり不満足、やや不満足、どちらともいえない、やや満足、かなり満足の5段階、価値観はかなりへだたりを感じる、ややへだたりを感じる、どちらともいえない、ややあてはまる、かなりあてはまるの5段階の設定である。）

この中の価値観を調査する方法としては、間接法と直接法が考えられる、間接法とは、日常生活で行なう種々の具体的な行動（例えば、テレビを良く見る）への適合度を測定し、それを集約再計算して価値観得

* 流通経済大学情報処理センター助手
Sohichi SAKABE

昭和61年6月6日受理

図-1 分析のフロー

点を求める方法である。この方法は、解答しやすいという利点があるが、調査項目が多くなり再計算の手順も複雑になりやすいという欠点がある。

直接法とは、価値観の内容を直接的に記述して、それへの適合度を問うという方法である。これは、間接法に比較すると設問が抽象的になり、ある程度の自己

表1 環境に関する項目

自然的環境
(1) 家のまわりの自然環境
社会的環境
(1) 保健・医療の施設やサービス
(2) 住民意志の反映
(3) 安全性
(4) ゴミ収集
(5) 日本の社会保障
(6) 日本の政治
(7) 日本の裁判制度
(8) 物 価
物財的環境
(1) 並木の上下水道
(2) 並木の道路（歩道及び車道）
(3) あなたの住んでいる住宅
(4) 交通機関の利便さ
(5) 教育・文化施設
(6) レジャー施設
(7) 買物距離
(8) 商店街品揃え
複合的環境
(1) 住んでいる地域
(2) 静けさ（あなたの住いの周辺）
(3) 周辺の景色

表2 価値観に関する項目

(1) 秩序社会派	(8) 欲望充足派
(2) 隠健禁欲派	(9) 協同共楽派
(3) 達観瞑想派	(10) 行動支配派
(4) 受容緑陰派	(11) 努力進歩派
(5) 慈愛同情派	(12) 社会建設派
(6) 気楽個人派	(13) 多彩柔軟派
(7) 享楽人生派	

分析が必要となるが、調査項目が価値観の種類の数だけで良く、その結果に複雑な加工計算を行なう必要もないという利点がある。

本研究においては、調査対象が研究学園都市の住宅地区の住人であることを考慮し、直接法を用いることにした。

単純集計結果は、環境満足度に対しては、主人と主婦の反応の分布はほぼ同じで、自然環境、道路、地域環境等が満足度が高く、それに対し、交通機関、物価日本の政治や社会保障等は不満が高くなっている。

価値観に対しては、主人と主婦の共通点はその時どきの欲求のおもむくままに思う存分に行動するタイプの価値観（享楽人生派、気楽個人派、行動支配派、欲望充足派）への適合度の平均値が低いことである。また、多彩柔軟派は両者とも適合度がトップである。相違点は、主人が努力進歩派へ上位の適合度を示すのに対して、主婦は秩序社会派への適合度が高いことである。

3. 環境満足度と価値観の関連

3.1 理論仮説

ここでの理論仮説は、「同一の環境に対する満足度は、主体の価値観と関連がある」と設定する。

本論では、主体と環境の基本的な関係を図-2のように考える、これは、主体と環境が、物質・エネルギー・情報を媒介としながら相互に変換・影響しあう主体環境系を示している、このように、主体は、環境から常に影響を受けているが、同一の環境条件において異なった個性が形成・表現されるのは、主体的要因によるものと考えられよう。¹⁾²⁾（図-3）

ここでは、この関係の範囲を限定して、環境満足度の個人差と価値観の関連を分析してみたい。（図-4）なお、個人的属性として、価値観の他に性別・年齢・収入等いくつかあげられるが、これらは価値観に集約されているものとする。

図-2 主体と環境の関係

図-3 個性の形成と表現

図-4 環境満足度の個人差

3.2 作業仮説

理論仮説を検証するために必要な作業仮説は、次の二つである。

- (1) 環境は、自然的環境・社会的環境・物財的環境に区分し、その他、複合的環境を設定した。
- (2) 個人の価値観を12の価値要因ベクトルの強弱の程度で表現した。

(1) 「環境」という言葉は、哲学・社会学・心理学・生物学・経済学等々、あらゆる分野で使用され、それぞれ各人各様に定義がなされている。本研究では、環境とは、「個人又は集団に直接的・間接的に影響を与える外界」と定義しておく。

環境の分類も環境の定義と同様、多様性に富んでいるが、ここでは、基本的に次の三つに区分する。

① （自然的環境）

〔1〕 人間生活の立地条件や基盤としての自然そのもの。

〔2〕 人間生活が改造したり、再生産させた自然

② （社会的環境）

〔1〕 人間生活が直接又は間接的に接触する集団的生活保持体系としての社会。

〔2〕 情報を通して経験する文化的環境

③ （物財的環境）

〔1〕 人間生活拡充のために作り出した技術体系としての物財環境（道具的環境）。

〔2〕 人間生活の共同保持のために維持している生活環境施設体系。

〔3〕 その他、日常生活で使用する物品

その他として、各環境の複合的環境を設定した。

(2) 価値についてもさまざまな定義がなされているが³⁾、本研究における価値観の作業仮説的定義は「個人の生き方において、自分の幸福に重要と考える行動の価値基準」としておきたい。

ここでの価値観は、個人のたてまえとしての価値観（観念的価値観）ではなく、個人の行動原理となっている本音の価値観（行動的価値観）を意味する。

次に価値観の分類であるが、環境満足度は生活の質を考えるうえで重要な項目の一つであるので、ここでは生活の質を意識した価値観の分類法を用いて関連の構造を分析することにした。

既存の研究で、そのような分類を行なっているものとして、三菱総合研究所のMRI—QOLインデックス⁴⁾、今村和男のQOL—BEDインデックス⁵⁾、米国のランド研究所のQOLファクター等⁶⁾がある。この三つの研究

は共通点が多いが、相関分析を行なう時サンプルを有効に使えること、個人の価値観を視覚的に表現しやすいことを考慮して、今村和男の行なった分類を観念的価値観から行動的価値観に変形して用いることにした。

(表3)

個人の価値観の表現方法は、三菱総合研究所と同様な立場に立つ。すなわち、従来の価値観分析手法では一個人の価値観を一つの主要な価値観に結びつけていて、とすると無理矢理に一人の人間の価値観を一つときめつけていたようなところがあった。しかし、ここでは、一個人の価値観を12種類の価値要因ベクトルの分布によって表現する方式をとる。このような分布によって表現できる価値観は、一人一人の「価値観スペクトル」とも呼べるであろう。

図-5 個人の価値観スペクトル

注) これは、今回の調査結果における価値観スペクトルの代表的な例である。(1)～(12)の番号は、表3の価値観と対応する。

表4 価値観の因子(主人)

ラン キン グ	第 1 因 子		第 2 因 子		第 3 因 子	
	ブ ッ ダ 因 子		ディオニソス因子		プロメテウス因子	
	固 有 値	2.893	固 有 値	2.267	固 有 値	1.811
	寄 与 率	24.11 %	寄 与 率	18.9 %	寄 与 率	15.09 %
	累積寄与率	24.11 %	累積寄与率	43.01 %	累積寄与率	58.10 %
1	達観瞑想派	0.82320	欲望充足派	0.86118	努力進歩派	0.88952
2	秩序社会派	0.74212	享楽人生派	0.85658	社会建設派	0.79108
3	隠健禁欲派	0.71024	気楽個人派	0.69859	行動支配派	0.53477
4	受容緑陰派	0.69529	行動支配派	0.39854	協同共楽派	0.41366
5	慈愛同情派	0.41715	達観瞑想派	0.14873	秩序社会派	0.24137
6	気楽個人派	0.34399	受容緑陰派	0.13467	慈愛同情派	0.20291
7	行動支配派	0.25360	隠健禁欲派	0.10368	欲望充足派	0.00232
8	協同共楽派	0.13057	努力進歩派	0.02242	隠健禁欲派	-0.00856
9	享楽人生派	0.06336	慈愛同情派	-0.01524	気楽個人派	-0.08869
10	努力進歩派	0.00165	社会建設派	-0.13234	達観瞑想派	-0.09836
11	欲望充足派	-0.14893	秩序社会派	-0.22022	享楽人生派	-0.11203
12	社会建設派	-0.17731	協同共楽派	-0.23730	受容緑陰派	-0.15486

注) 各価値観の右側の数字は、因子負荷量である。(因子負荷量は、因子と変数の相関係数を示す)

表3 価値観の種類と内容

<p>(1)〔秩序社会派〕私は社会のルールや慣習を大切にし（例、冠婚葬祭・正月・節句・法事・七五三等は型通り行なう）反体制・反動的なものには批判的である。過度の欲望を避け、慎しみと知性をもって秩序ある社会生活を送っている。</p> <p>(2)〔穏健禁欲派〕私は、自己の内面を見つめつつ社会生活を送っている。冒険的な行動や世俗的な欲望は慎しみ、また隣人への愛とか社会奉仕へのめりこまない。ひたすら自分の心の平静を保つことによって穏健な社会生活を送っている。</p> <p>(3)〔達観瞑想派〕私は、自分自身の精神的な充実を重視して生活している。社会を変革したり自然を支配することは望まないし、また欲求のおもむくまま安楽に暮らすことも望まない。ひたすら自己の修養に努めて、悟りの境地を追求する内面的生活を送っている。</p> <p>(4)〔受容緑陰派〕私は、大自然の理法を受け入れて生きている。欲望・行動・社会・知性・愛、それらのどれにもとらわれることなく、やすらかに心を開くとき、おのずから体内に満ちてくるものがある。それを受け入れることによってやすらかな喜びが得られる。</p> <p>(5)〔慈愛同情派〕私は、他人への思いやりや愛を大切に生きていく。人生を豊かにするものは、知性や行動ではなく、共感的な愛である。だから、そのためには、社会を超越することがあっても良いと思う。同情の気持を忘れず、他を尊重して生きたいと思っている。</p> <p>(6)〔気楽個人派〕私は、気楽な生活を送っている。自己の修養・他人との協力・社会の建設・あるいは、自己の欲望を満たすために努力することなどは好まない。多くを望まず、日々の暮らしを気楽に送っていれば、それがおのずから幸福な人生につながると思っている。</p> <p>(7)〔享楽人生派〕私は、人生の楽しみを進んで享受している。人もまた、それぞれ自分の気持ちに従って楽しめばよい。だから他から規制されることは望まないし、他へ要求することもない。社会や他人とのかわりあいを避け、時として瞑想的に、時として</p>	<p>感覚的に楽しんでいる。</p> <p>(8)〔欲望充足派〕私は、積極的に人生の楽しみや喜びを追求している。それらは節度ある生活や単なる気楽な生活、あるいは社会に建設的に参加することからは得られない。その時どきの欲求のおもむくままに、思う存分行動し、欲望を充足した時に得られると思っている。</p> <p>(9)〔協同共楽派〕私は、他の人々と協力して楽しい人生を送っている。自己の内面的生活や秩序ある社会の建設、あるいは個人的な気楽な生活よりも、他人と共に活動し、共感し、喜び、楽しむことを望む。人々は協同の目的を実現するために協力すべきと思っている。</p> <p>(10)〔行動支配派〕私は、行動的な生活を送っている。穏健な思想や安楽な生活、あるいは他人への同情などより勇敢で冒険的な生活がよい。身体的エネルギーを用いて積極的に活動することによって障害を圧倒し、支配し、征服する。この中にこそ人生の喜びはある。</p> <p>(11)〔努力進歩派〕私は、活動的な社会生活を送っている。内面的生活や享楽的な生活は望まない。それよりは種々の問題の具体的な解決をはかるために努力し、活動することの方が好きだ。科学や技術を発展させて社会を進歩させるためにたえず、努力している。</p> <p>(12)〔社会建設派〕私は、建設的な社会生活を送っている。気楽な個人的生活は望まない。厳しい自然や社会の内であっても人間の理性を信じて外界を支配し変革するために努力し、活動している。理想を保持し、合理的な行動をすることによって人間の気品と尊厳が保たれると思う。</p> <p>(13)〔多彩柔軟派〕私は、柔軟性のある生活を送っている。人生をひとつの目的や価値観や生活様式で貫くことは、かたよった生き方だと思う。自分自身のうちに、多様性を養い、時と場合に応じて柔軟な生活態度がとれることが大切だと思っている。</p>
---	---

表 7 環境満足度と価値観の関連（主人）

環 境	価 値 観	相関係数	関 連 の 意 味
・保健・医療の施設やサービス	行動支配派	0.42	健康で行動的な人は、保健・医療に対する満足度が高い。
・住民意思の反映	享楽人生派	0.47	生活は快適で不満が少ない。
・安全性	〃	0.30	〃 安全である。
・日本の社会保障	〃	0.29	〃 社会保障に対する不満も少ない。
・日本の政治	〃	0.38	〃 政治に対する不満も少ない。
・物 価	〃	0.43	〃 物価に対する不満も比較的少ない。
・交通機関の便利さ	行動支配派	0.35	行動のための交通手段を備えている。
・景 色	欲望充足派	-0.29	景色への欲求が強い。

例えば、主人の住民意志の反映と享楽人生派の関連をみてみよう。享楽人生派への適合度が高い人は、人生の楽しみを積極的に享受しているので、生活は快適で不満が少ない。そのため、地域における住民意志の反映に対しても相対的に不満が少ないと考える。（正の相関）

価値観と環境満足度の関連において、主人と主婦の相違は、主人は、日本の社会保障、日本の政治等のマクロ的な環境に関連がみられ、それに対して主婦は、家のまわりの自然環境、地域等の日常生活で接する時間の多い項目に関連がみられる。

それに対して、主婦と主人の共通点としては、次の三点があげられる。(1)物財的環境より社会的環境の項目への関連が多いこと。(2)価値観の種類としてブッダ因子の強い価値観（達観瞑想派、隠健禁欲派、受容緑陰派、秩序社会派）との関連が殆どない。(3)主人と主婦において環境と価値観の関連が同一のものは、保健・医療の施設やサービス：行動支配派、物価：享楽人生派、交通機関の便利さ：行動支配派、周辺の景色：欲望充足派の4項目である。

その理由は、(1)は、価値観は物質的なものよりも文化に多くその関連が表われやすいこと、(2)は、ブッダ因子（欲求を抑制する生き方）は、環境に対する不満も少ないが、欲求充足に伴う喜びも高くないため、満足、不満足どちらにも関連しないと考える。

次に、全体的な特徴を分析するために環境と価値観の変数で因子分析を行なった。なお、変数として他の項目の適合度を加算した総合的環境満足度変数を新たに付け加えた。

分析の結果は、表 8、表 9 のようになり、1 軸は総合的環境満足度、3 軸は欲求抑制型—欲求充足型と命

名した。この表の因子負荷量をプロットしたのが図-6 である。

この図から、総合的環境満足度に対しては、欲求抑制型の価値観の適合度が高い人は欲求充足型との比較において、相対的に正の関連が低いことが分かる。

満足度を高め、あるいは不満を少なくするためには、欲求を充足するか欲求そのものを抑制するという二つの方法が考えられる。今回のケースにおいては、満足

表 8 環境と価値観の因子分析（主婦）

ラ ン キ ン グ	第 1 因 子		第 3 因 子	
	総合的環境満足度	欲求充足型	固 有 値	2.901
	固 有 値	5.502	固 有 値	2.901
	寄 与 率	16.18 %	寄 与 率	8.53 %
1	総合的環境満足度	0.474	欲望充足派	0.641
2	交通機関の便利さ	0.659	行動支配派	0.601
3	保健・医療の施設やサービス	0.626	物 価	0.492
4	買物距離	0.606	享楽人生派	0.467
5	住んでいる地域環境（並木）	0.599	社会建設派	0.455
6	レジャー施設	0.598	気楽個人派	0.394
7	あなたの住んでいる住宅	0.598	保健・医療の施設やサービス	0.373
8	教育・文化施設	0.526	努力進歩派	0.340
9	家のまわりの自然環境	0.484	協同共楽派	0.274
10	商店街品揃え	0.482	交通機関の便利さ	0.219
11	並木の道路（歩道及び車道）	0.468	住民意志の反映	0.197
12	ゴミ収集	0.424	慈愛同情派	0.179
13	静けさ（あなたの住いの周辺）	0.388	並木の上下水道	0.152
14	日本の裁判制度	0.355	多彩柔軟派	0.114
15	周辺の景色	0.353	並木の道路（歩道及び車道）	0.112
16	行動支配派	0.311	日本の社会保障	0.105
17	住民意志の反映	0.298	あなたの住んでいる住宅	0.077
18	日本の政治	0.296	レジャー施設	0.070
19	日本の社会保障	0.282	日本の裁判制度	0.065
20	秩序社会派	0.262	日本の政治	0.024
21	隠健禁欲派	0.214	安全性	-0.012
22	並木の上下水道	0.202	総合的環境満足度	-0.016
23	受容緑陰派	0.197	教育・文化施設	-0.028
24	安全性	0.182	買物距離	-0.031
25	努力進歩派	0.132	達観瞑想派	-0.071
26	達観瞑想派	0.125	商店街品揃え	-0.072
27	気楽個人派	0.116	受容緑陰派	-0.092
28	慈愛同情派	0.090	ゴミ収集	-0.128
29	物 価	0.088	隠健禁欲派	-0.213
30	協同共楽派	0.075	秩序社会派	-0.278
31	欲望充足派	0.022	家のまわりの自然環境	-0.330
32	享楽人生派	0.012	静けさ（あなたの住いの周辺）	-0.364
33	社会建設派	-0.018	住んでいる地域環境（並木）	-0.433
34	多彩柔軟派	-0.306	周辺の景色	-0.441
			欲 求 抑 制 型	

表5 価値観の因子（主婦）

ラン キン グ	第 1 因 子		第 2 因 子		第 3 因 子	
	プロメテウス因子		ディオニソス因子		ブ ッ ダ 因 子	
	固 有 値	2.991	固 有 値	2.096	固 有 値	2.026
	寄 与 率	24.92 %	寄 与 率	17.47 %	寄 与 率	16.88 %
	累積寄与率	24.92 %	累積寄与率	42.39 %	累積寄与率	59.27 %
1	行動支配派	0.82645	享楽人生派	-0.81211	達観瞑想派	0.76431
2	努力進歩派	0.76877	欲望充足派	-0.80469	隠健禁欲派	0.68892
3	社会建設派	0.72120	気楽個人派	-0.70914	秩序社会派	0.65519
4	協同共楽派	0.71530	行動支配派	-0.22344	受容緑陰派	0.58999
5	慈愛同情派	0.50774	受容緑陰派	-0.15384	慈愛同情派	0.48512
6	欲望充足派	0.16861	隠健禁欲派	-0.11235	気楽個人派	0.07066
7	受容緑陰派	0.11010	達観瞑想派	-0.04751	享楽人生派	0.04158
8	秩序社会派	-0.03175	慈愛同情派	-0.03970	欲望充足派	-0.00026
9	達観瞑想派	-0.07469	社会建設派	-0.01759	社会建設派	-0.00379
10	享楽人生派	-0.10583	協同共楽派	0.19009	協同共楽派	-0.00971
11	気楽個人派	-0.18428	努力進歩派	0.23219	行動支配派	-0.01841
12	隠健禁欲派	-0.45242	秩序社会派	0.38792	努力進歩派	-0.18011

ブッダ因子とは、欲求を規制することによって心の安らぎを保とうとする欲求、ディオニソス因子とは、その時々欲求のおもむくままに思う存分に行動する欲求、プロメテウス因子とは、外界を支配し変革するために活動し努力する欲求である。

これらの因子は、イギリスの心理学者、チャールズ・モリスの三つの「価値の基本的次元」と一致する。もともと、本研究で用いた価値観の分析手法は、チャールズ・モリスの研究⁷⁾を発展させたものなので、このような因子が抽出されたことは、価値観の分類と調

査結果の信頼性が高いことを示している。（表4.表5）

4.4 分析結果

価値観と環境満足度の関連を分析する場合、環境満足度は客観的水準によっても左右されるので、分析対象を同一の環境に限定した。そのため、収入と余暇、人間関係、環境全般等の項目は除外している。

両者の関連を分析するため相関係数を求め、5%の検定水準で有意とみなされたもの、また、その中から疑似相関と思われるものを除いて表にしたのが表6、表7である。

表6 環境満足度と価値観の関連（主婦）

環 境	価 値 観	相関係数	関 連 の 意 味
・家のまわりの自然環境	気楽個人派	-0.35	もっと自然に恵まれた所で気楽に暮らしたい。
・保健・医療の施設やサービス	行動支配派	0.30	健康で行動的な人は、保健・医療に対する満足度が高い。
・住民意思の反映	気楽個人派	0.41	気楽に生活を送っているので、住民としての不満も少ない。
”	協同共楽派	-0.31	地域の人々と協力して、もっと住民意志の反映を高めたい。
・日本の裁判制度	秩序社会派	0.32	社会の秩序維持のための日本の裁判制度には、まあ満足している。
・物 価	享楽人生派 欲望充足派	0.32 0.28	生活は、快適で物価に対する不満も比較的少ない。
・交通機関の便利さ	行動支配派	0.30	行動のための交通手段を備えている。
・住んでいる地域環境（並木）	欲望充足派	-0.27	より以上の快適な地域環境への欲求が強い。
・周辺の景色	”	-0.28	景色への欲求が強い。

表9 環境と価値観の因子分析(主人)

ラ ン キ ン グ	第 1 因 子		第 3 因 子	
	固 有 値	寄 与 率	固 有 値	寄 与 率
1	総合的環境満足度	7.267	欲求抑制型	2.754
2	固 有 値	21.37%	秩序社会派	0.756
3	寄 与 率	0.973	隠健禁欲派	0.611
4	総合的環境満足度	0.724	遠観瞑想派	0.581
5	日本の政治	0.607	受容緑陰派	0.486
6	物 価	0.603	恋愛同情派	0.484
7	家のまわりの自然環境	0.593	協同共楽派	0.334
8	日本の社会保障	0.584	行動支配派	0.315
9	保健・医療の施設やサービス	0.575	交通機関の便利さ	0.250
10	買物距離	0.570	努力進歩派	0.199
11	住んでいる地域環境(並木)	0.568	教育・文化施設	0.137
12	交通機関の便利さ	0.540	買物距離	0.132
13	商店街品揃え	0.534	保健・医療の施設やサービス	0.127
14	住民意志の反映	0.518	レジャー施設	0.107
15	安全性	0.513	安全性	0.102
16	享楽人生派	0.511	静けさ(あなたの住いの周辺)	0.087
17	あなたの住んでいる住宅	0.495	周辺の景色	0.073
18	レジャー施設	0.473	商店街品揃え	0.069
19	教育・文化施設	0.469	気象個人派	-0.067
20	日本の裁判制度	0.469	社会建設派	-0.021
21	並木の道路(歩道及び車道)	0.418	静けさ(あなたの住いの周辺)	-0.036
22	行動支配派	0.381	日本の裁判制度	-0.040
23	静けさ(あなたの住いの周辺)	0.380	並木の上下水道	-0.058
24	受容緑陰派	0.361	総合的環境満足度	-0.060
25	並木の上下水道	0.341	日本の政治	-0.095
26	欲望充足派	0.336	あなたの住んでいる住宅	-0.107
27	周辺の景色	0.319	日本の社会保障	-0.133
28	気象個人派	0.304	ゴミ収集	-0.183
29	多彩柔軟派	0.304	住んでいる地域環境(並木)	-0.187
30	遠観瞑想派	0.287	並木の道路(歩道及び車道)	-0.197
31	秩序社会派	0.216	多彩柔軟派	-0.216
32	ゴミ収集	0.179	享楽人生派	-0.238
33	社会建設派	0.139	欲望充足派	-0.282
34	恋愛同情派	0.122	家のまわりの自然環境	-0.303
35	努力進歩派	0.120	物 価	-0.400
36	隠健禁欲派	0.012		
37	協同共楽派	-0.119		

欲 求 充 足 型

度を高める要因として抑制型よりも充足型の方が相対的に高い関連を示すことが分かった。1軸と3軸の相関係数は、主人が-0.48、主婦は-0.38である。

それ以外の因子間においては、関連はみられなかった。

<おわりに>

環境の調査項目20個のうち、相関係数はそれ程大きくはないが約半数が価値観との関連がみられた。関連がない項目の殆どが物財的環境であり、それに対し社会的環境はほぼ全ての調査項目に関連がみられた。このことから、今回の調査対象の場合、価値観は社会的環境に対する評価への影響力が相対的に強いことが分かる。

調査における今後の課題としては、地域や調査対象による関連の差、調査する環境項目の種類、そして価値観の分類と内容があげられる。それは、全ての人間の価値観を13種類に限定することの限界、また、各価値観の記述内容の妥当性の問題である。

<謝 辞>

本研究を進めるにあたり、調査にご協力頂いた筑波研究学園都市の並木住宅地区の方々に厚く感謝します。さらに研究に対する指針を示して頂いた筑波大学環境科学研究科の吉川博也先生に厚く感謝します。

<参考文献>

(1) Gold,J.R.(1980) : An Introduction to Behavioral Geography, Oxford University Press.

(2) Ackoff,R.L. and Emery F.E.(1972) : On Purposeful Systems, London,Tavistock Publications.

(3) L.V.ゴードン著,菊地章夫訳(1975) : 価値の比較社会心理学,川島書店

(4) 牧野昇編(1976) : 環境アセスメントとその手法,三菱総合研究所,pp.131~149.

(5) 今村和男編(1977) : システム分析,日科技連,pp.158~183.

(6) Dallkey, Norman C.(1972) : Studies in the Ovality of Life, Rand Corporation.

(7) Morris, Charles (1973) : Varieties of Human Value, Bks Demand UMI.

図-6 因子負荷量の関連(主人)